

2021年8月1日（日）／説教者：神谷武宏

説教：「主の御手がのぞむ」

聖書：エゼキエル書 1：1～14，28

預言者エゼキエルの時代は、南ユダ国がバビロニア帝国との戦争に敗れ強制連行され、王を始めとする多くの指導者、役人、軍人、技術者、また祭司たちも連行され、その中にエゼキエルも含まれていた。敵国の片隅に不自由と抑圧の中でおびえながら暮らしていく。

ここは黙示文学という内容であるために分かり辛い。ここに出て来る生き物を通して、私たちの神は、“生きておられる”ことを伝える。あなたがどこに居ても、神は四つの顔を持って四方八方に目をくぼり、あなたを見ておられる。たとえ遠くの地、バビロンの地に連行されようとも大きな車輪であなたを追いかけ、四つの翼を持ってあなた方を探し、獅子のように、牛のように、鷲のように力強い神はあなたと共に居られるのだ、と語られている。

この後、エゼキエルは民に一生懸命主なる神は生きておられる、神は共に居てくださる・・・ということ伝えて行く中で、その預言者のメッセージを通して多くの民が励まされ、信仰を見出して行くのであるが、実はこの苦しい捕囚の時代に律法が確立され、主なる神に対する信仰が確立されて行く。その信仰告白の一つに創世記の天地創造物語がある。天地創造物語は、このバビロン捕囚の時代にこの場所で生まれた。

「初めに、神は天と地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にある」、この地は「混沌」である。この地は「闇が深く」どこまでも闇であるかのように戦争の破壊があり、苦しみや悲しみが尽きない。しかし神は、地の上に天を造っておられた。私たちの上に天はある。「闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いている」。「神は言われた。『光あれ』こうして、光があった」、「光」は与えられた。もう既に光はあるのだ。「神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。」今、私たちは、苦しみ、悲しみの只中にあるが、しかし闇はいつまでも闇のままであることはない。夕べがあり、夜があるように、必ず朝がある。主の光は必ずおとずれ、希望の光として、私たちを慰め、励まし、私たちを支えてくださる。

ユダの民は、バビロン捕囚の民とされ、いつ解放されるのか、ここで死ななければならないのか、非常に厳しい現状にありながらも、希望の光を見る。主の御手が私たちの上に臨んでいることを知るのである。（神谷）